

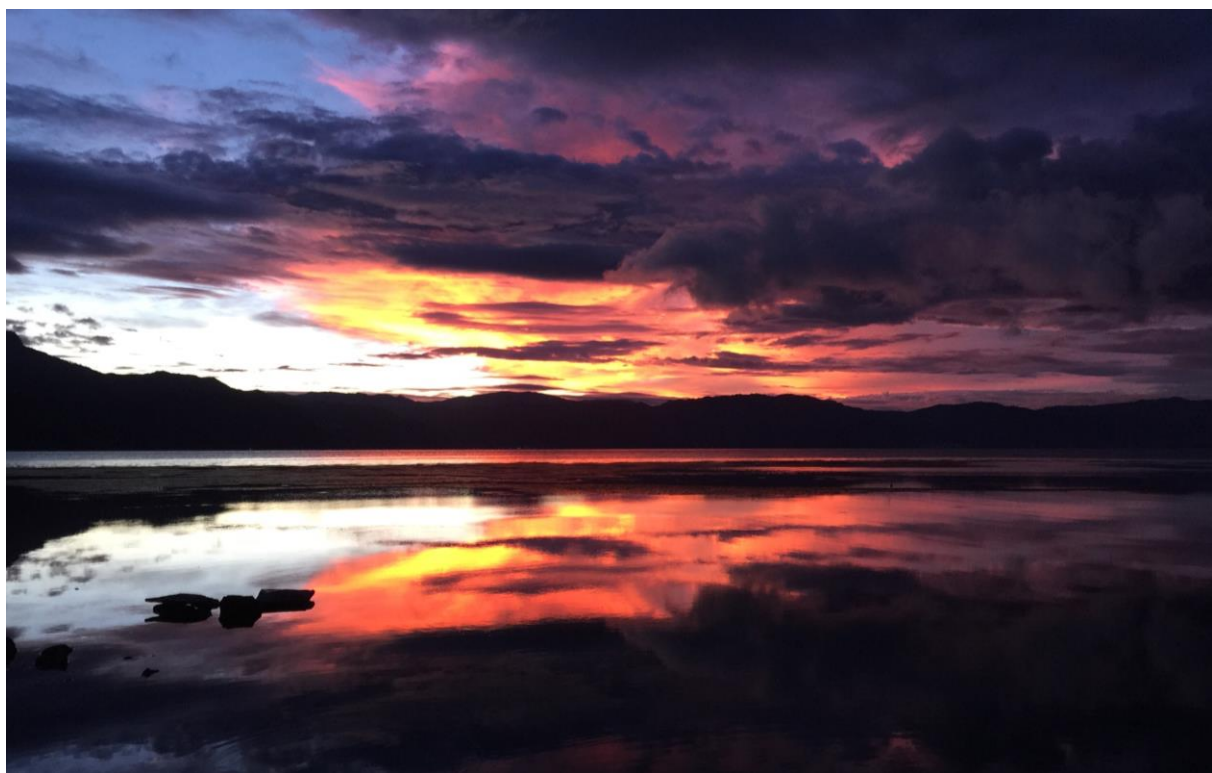
編集/コンビニの会事務局  
連絡先/〒452-0807 名古屋市西区歌里町 147 番地  
TEL/FAX(052)505-6082(コンビニハウス)

障害をもつ人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人  
コンビニの会

定価/150 円  
昭和 54 年 8 月 1 日第三種郵便物承認

第149号



夕暮れのアティトラン湖。穏やかな一日の終わり。

コロナをきっかけに

漁師として暮らす

グアテマラ在住日本人宿経営

辻 秀樹

御縁がありこのコラムで2回目の執筆のご依頼をいただきましたグアテマラで宿を営んでおります辻です。

コロナ禍で世界中が疲弊していく毎日、コロナの影響で私も自分の人生を見つめ直す大きな節目となる激しい1年となりました。

観光客の途絶えた村はまるでゴーストタウンの様になり、多くの人が職を失いました。そして私も。そこで私は漁師として暮らす事を選択したのです。

ソロラ県にはアティトラン湖という大きな湖があります。約50年ほど前にアメリカから持ち込まれたブラックバスが生息しています。私の住む村ではこの魚が食用として消費されています。釣りを仕事にしてみようと思いついたのは、私が釣った魚を村人がとても欲しがったことから始まりました。ブラックバスは肉以上の高値で取引されているのです。

(次頁へ)

この村の漁師達は刺網漁と籠を使ったカニ漁がメインですが私はルアーを使って岸から一本釣りです。若い頃プロとしてトーナメントに出場していたこともあり、知識と経験が私のすべて。まさに私の生活は腕次第となりました。明け方から夕方、時に夜まで、厳しい日もありますが、この暮らし方は私に裕福な気持ちを与えてくれたのです。

物珍しそうに見ていた漁師達とも今ではすっかり仲良くなり、今ではペスカドル（漁師）のあだ名がつくまでになっています。

外国ならではの苦労もあり、一時はどうなるかと不安になりましたが、豊かな自然の中でその一部となって恵みを甘受する暮らし方は予想外に素晴らしく穏やかな日々を過ごしています。

村も以前の暮らし方に戻りつつあり、週末には首都からの観光客で賑わうようになりだしたサンペドロ。すべてが以前のようにには戻らないかもしれませんが早くコロナが終息に向かうことを願うばかりです。



3 ポンド(1.5kg)の魚は日本円にして 1000 円程、スズキ科のブラックバスは臭みもなく  
以外と美味しいんです。

## 雑記 ごまめの歯ざしり

### 新しい鶏小屋

鳥インフルエンザがパンデミックのごとく、猛威を振るってる今、うちの鶏たちは小屋に閉じ込めてます。ニュースになるような数万羽の鶏たちが殺処分になる中、国は小規模の養鶏業者や僕らのような100羽未満のペット扱いのようなとこまで、指導をして、感染拡大の防止を図ってます。うちの鶏は今40羽。この秋までは昼間は小屋から出して柵の中で放し飼いでもなんとも気持ちよさそうに過ごしてましたが今はちよっと手狭な小屋の中にいます。そこで、いつか大きい小屋を建てようと言ったことがこれがチャンスと、古くなった柵も取り外し、新しい鶏小屋を建てることになりました。まずは材料から。友人の使わないヒノキ林で林業をやっている友人とともに、木を切り倒し、皮をむいて。大きめの石を探して、レベールを見て地面に埋め込んで基礎にします。

先日からいよいよ棟上げ。と言っても2mや3mの丸太、長いもので6mもあると、なかなか思うように立たず、苦戦してますがなんとか建てて行けそうな目処が立ちました。あとは水。

今の小屋は雨水が溜まるようにしたり、川の水を汲んでバケツで運んでなどしてありますが、もうちよっと自動的に、常に新鮮な水が手に入らないかと、いろいろ考え、近くの田んぼの用水路からパイプで引かないかなあと様子を見に。それでも鶏小屋まで200mほど。遠いなあと話していると近所のおじちゃん登場！「こつから引くしか無いわなあ」と用水路の1番近いとこを教えてくれるもさほど距離は縮まず、大仕事だなあと話していると、「水ってちよっとで良いんか？」「チョロチョロやつたら湧水あるぞ！」と。えっ!! 用水路よりも近くの竹藪の脇からチョロチョロ流れてました。こんなところにあるなんて。新しい小屋が建ったら、きっとうちの鶏たちはお喜びのことでしよう！

## 自立への準備

### ～Aさんのケース～

エゼル福祉社会は設立当初から障害の重い人の自立にこだわり事業を行ってきました。二十年程前までは家庭で介護できなくなったら入所施設に行くのがあたりまえでしたが、この十数年で充実してきた居宅介護のサービスを利用することで多様な自立生活が可能になってきました。

2007年に西区赤城町にパルハウス（当時は共同生活介護）とワンルームマンションを作り十名の自立生活を支えてきました。振

り返ると金も時間も支援者も足りない状況からのスタートでした。そのため様々な問題が発生して当事者は混乱し、家族は不満に思い、介護する側はオーバーワークで心身を疲弊し離職者が出るなど落ち着くまでに予想外に時間がかかりました。

次年度に新施設に着手する計画はすでにお知らせした通りです。今度こそ経験から学びスマートなスタートをしたいと考えていましたが、コロナウイルスが流行し気軽に顔を合わせて話をするこす難しくなっています。親の願い、当事者の思い、エゼル福祉会の事情など意見交換をして具体化したものにがっかりしています。

個別の事例の中に誰にでも共通するスモールステップがあります。昨年夏から自立に向けての準備をしている三十代前半Aさ

ん（名古屋市外在住）のケースをご紹介します。自宅の二階の自室からスタートして自立生活への本格的な準備が始まりました。今回は三人、元職員で支援の中心にいる大脇さん（現サポートセンター1つぽ）、学校を卒業して通所することになったWILLでの最初の担当者だった有満さん（現VOLO）、現在コンビニハウスでの支援の担当である久野さんからの聞き取りをまとめました。

### ～Aさんのケース～

通所を始めたころは新しい環境になじめず警戒し、周りの様子をよく観察していた。周囲の変化に弱く、緊張が強くなり動けなくなってしまうことがよくあった。しかし徐々に慣れて人間関係が広がった。現在は軽作業に積極的に取り組み、休みたくないと言って

いる。理由を問うと仕事をしないとお金がもらえない。そうすると喫茶店で好きなコーヒーが飲めなくなるからと答えてくれた。

父の在宅療養のために母は超多忙だ。母を休ませるためにも支援の必要性が高いと考え、一週間に一〜二度宿泊し、夕食から翌朝に出かける準備までAさんが決めたスケジュールで過ごすことにした。家族にあらゆることを用意してもらっていた生活はぬくもりがあつて楽ができる。しかし、自宅で暮らしているとどうしても自分で選択する経験が少ない。夕食のメニューを考えて決めたりするのはとても疲れる。だれもが最初にぶち当たる壁で、中には体調を崩す人までいるほどだがAさんの場合は両親の大変さを気遣い頑張っている。

加えて支援者を増やす目的と楽しさを経

験するために通所から帰宅した夕方以降の余暇支援を行っている。「父と散歩に行きたい。」「高級感のある喫茶店で美味しいコーヒーが飲みたい。」本人の希望を叶える経験を重ねて自分のやりたいことや新しいことへ興味が広げられるとい

い。我慢しているとモノにあたったり、むしゃくしゃするとイタズラをする。自分で選択する喜びが自信と落ち着きにつながる。



次の段階として慣れてくると支援者に遠慮なしに甘えたり、試すような行動が出てくる。歯医者予約があるのに朝「起きたくない」そんな時は本気で叱ることがある。また「甘えてもこの人は二度目は許してくれる

けど二度目は厳しいぞ」ということがわかってくるとこじれることはない。真剣にぶつかり、その後はスッキリいく。じぶんのために本気で関わっていると感じれば信頼関係が深くなる。

最初の支援者と信頼関係ができると次からは短い時間で新しい支援者を受け入れるようになる。今後は泊数を増やし、家族以外の他人と過ごすことに慣れて本格的な自立生活に移行させていきたい。

### 〽 今やれること 支援者から 〽

**元職員・大脇さん** 支援者としてごはんを食べたり、外出したり、楽しい体験を重ねることが大切です。信頼関係を深めることで妥協したり、許容できるようになり生活が落ち着きます。ご家族は本人がその壁をこえる様子を見

守って下さい。残念ながら出会いの運やタイミングがあるのですべての人が公平に自立生活に入るのが難しいのも現実です。

**通所部職員・有満** Aさんの場合、たくさんある通所施設の中から電車に乗らなければ通えないWILLを選んでくれた期待に応えなかった。ご家族と私たちの間でも信頼関係を築くことが大切です。本人の気持ちを最優先にして、精神的な自立ができるまで年単位で時間がかかるものです。ご家族には本人の成長を気長に待ってほしい。

**生活支援部職員・久野** ショートステイの場所が中小田井から歌里に移った時に利用者さんが混乱して眠れなかったりするのではと覚悟していました。ところが皆さん落ち着いて普段通りでした。場所よりも支援者が変わらなことが大切なのだと気付きました。

## 最後に

エゼル福祉会では定期的にケース会議などで自立生活の経験を職員間で共有しています。また、2012年にコンビニハウス十五周年記念誌「みんなでつくったそれぞれの時間」や「当事者参加の自立を考える～私達ぬきに私達のことを決めないで～報告集」をぬきに私達のことを決めないで～報告集」を作り、2017年の二十周年では自立生活についての発表を行なっています。障害の重い人が自立生活をする事例は家族に希望を与え、支援者の励みになります。今の二十代は学校に通っている頃から家族以外の支援を受ける経験をしているので、ショートステイでも慣れるのが早いそうです。自立に必要なことは障害の軽重ではなく、経験の広がりとして積み重ねです。

(まとめ役 宮川 優子)

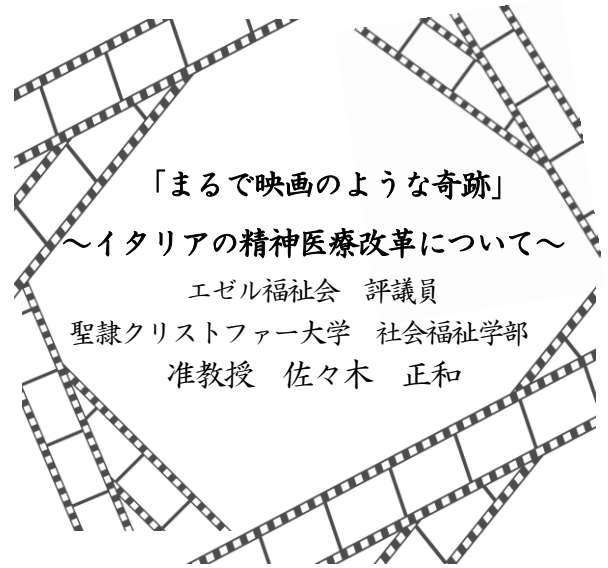


15周年記念誌

「みんなでつくったそれぞれの時間」



「当事者参加の自立を考える～私達ぬきに私達のことを決めないで～報告集」



私は、大の映画マニアです。1940～50年代の古い映画ですが、ロベルト・ロッセリーニの「無防備都市」、ヴィットリオ・デシーカの「自転車泥棒」などのイタリア映画が大好きです。この2つの映画は当時の社会にあった「戦争」「貧困」「家族」「労働」等の現実問題を背景に人々の「深い愛情」を活

写した映画でした。このような映画を当時「ネオ・レアリズモ」と呼びました。そのかつての「ネオ・レアリズモ」の潮流を感じさせる現代の映画があります。マルコ・トゥリオ・ジョルダーナの「輝ける青春」、シルヴァーノ・アグステイの「ふたつめの影」、ジュリオ・マンフレドニアの「人生ここにあり!」、そして、マルコ・トゥルコの「むかしMattoの町があつた」では、とても愛情深い素敵な登場人物を描いています。実はこの4つの映画には3つの共通したキーワードがあります。それは、「精神障がい者」「バザーリア」「精神科病院解体」というキーワードです。

1960年代のイタリア、精神科医バザー

リアが院長として赴任した精神科病院では入院している精神障がいのある方の人権が侵害され、長期入院させられている状態を目の当たりにしました。そこでバザーリアは、入院されている方の権利回復のため精神科病院解体を決断しました。そして、それは国をも動かし1978年に精神科病院を解体する法律「180号法」ができます。法律成立後、紆余曲折がありましたが、現在のイタリアでは、総合病院等での緊急での短期入院病床や司法病棟以外、ほとんどの精神科病床が廃止されました。精神科病院から退院した精神障がいのある方々は、地域の精神保健センターといわれる支援機関にいる看護師、医師、ソーシャルワーカー等に支えられながら

地域でごくあたりまえの暮らしができるようになりました。仮に地域生活している精神障がいのある方の精神症状が悪化しても、精神医療の専門職は隔離室への隔離や身体拘束を行いません。徹底的によりそい、傾聴し、時にハグをしながら症状がおちつくのを待つのです。

冒頭で紹介した現代の4つの映画は、全く別の監督が、まるで架空の映画でしか起こりえないような、しかし現実起こったイタリアの精神医療改革の奇跡を、映画の中で描いています。それは現実起こったことを描いているが故に、観るもののこころを激しく揺さぶります。私自身、イタリアへ精神保健福祉研修に行き、映画で起こったことが実現さ

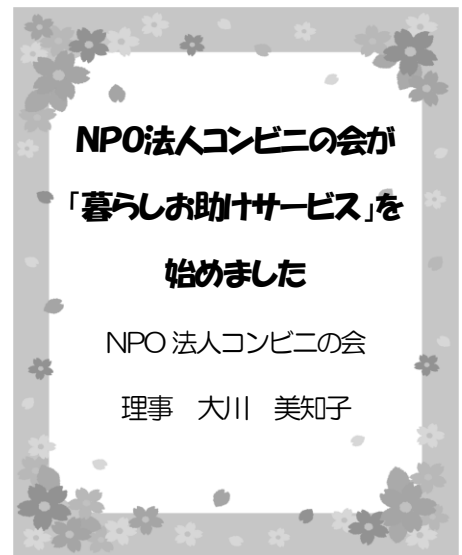
れていることを知りました。精神障がいの権利を徹底的に守るという崇高な理念が法制度化され、それを現実社会で実現させていました。

転じて、日本の精神科病院の状況です。日本の精神科病院には約28万人の方が入院し、その内1年以上の長期入院の方が約17万人おられます。世界一の入院者数と長期入院者数です。ここ20年、長期入院者の退院促進や地域移行の政策が出されてきましたが、いまだに長期入院の問題は全く解決していません。本来地域で生活できる方々が「退院したい」、「地域で暮らしたい」と願いながら、その願いを果たせず、精神科病院で長期入院したまま生涯を終えることも少なくありま

せん。この問題は、どこかの誰かの責任ではなく、私を含め、国民みんなに責任があると感じます。

私は先に紹介した現代の4つの映画を観た時、身につまされる思いがしました。それは、映画に描かれているかつてのイタリアの精神科病院で起こった悲劇が、日本ではまだ現実に起こっていることに対してです。しかし、そこにとどまって愚痴を言っているわけにはいきません。イタリアのような精神医療改革を、この日本で実現するにはどうしたらよいのか？その問いを胸に、仲間と共に精神医療改革のための活動が続けていきたいと思います。





NPO法人コンビニの会が新しい事業を始めることになりました。事業の名称は「暮らしお助けサービス」。提案者は私、大川美知子です。

今回は、その新しい事業を提案するに至った私の個人的な事情や、最近、私の身に起きた出来事をお伝えしようと会報の紙面を頂戴しました。

重い障害と向き合いながら障害福祉の充実に奔走して48年の人生を走りぬいた長女由紀子については、読者の皆様も良くと存じのことと思います。

娘は20歳で私のもとを離れ、一人暮らしのマンション生活を楽しんでいました。その楽しい暮らしに一役買っていたのが18年も飼われていた2匹の猫でした。娘が召されたあと、飼い主に先立たれた2匹の老猫が何とも哀れで、仕方なく私が引き取るようになりました。この2匹が我が家の猫になる3年前に、1匹の黒い子猫を私は娘から押し付けられて黒猫「叶音」（カノン）の飼い主になっていました。

今でも叶音はビニールの紐や、袋の切れ端が大好きで、時々飲み込んで「コッキン、コッキン、うえっ！」と吐き出しています。子猫のころ由紀子の点滴の管にかみついて、点滴が漏れ出し、真夜中にベッドが水浸しになったことがあり、「このいたずら猫と一緒に暮らせない・・・」ということで私が引き取るようになりました。そうした事情で結果的に私は自分の意志とは関係なく3匹の猫の飼い主になってしまいました。

私は今、マンションの10階に住んでいます。

すが、昨秋にエレベーターの工事があり、工事終了までの2週間、ホテルにでも住むか、毎日10階まで自力で上り下りするしかないと言った究極の選択を迫られることになりました。猫を連れてホテルに泊めてもらうことも出来ず、連日10階までの往復もできない。困り果てていましたが、短期間の借家暮らしをしようと解決策に辿りつきました。さて、問題はここからです。3匹の猫と14日間を暮らす衣類や食器を持って、新たな暮らしの場に移動することは70歳を越えた私には大変なことでした。猫を飼う経験をした方にはお分かりかと思いますが、猫3匹を同時に捕まえて移動用のバッグに入れることは、ちよつとした技を要する作業です。引越センターに頼んでも事は解決しそうに無く、何より猫に信頼されている人の力が必要でした。

その時、私は娘のヘルパーさんの中に3匹の猫と親しい人たちが幾人か居たことを思い出したのです。日頃から繋がりのある人を



「助け人」として登録して貰い、暮らしを支えてもらう事業を作って行こうと「暮らしお助けサービス」のイメージを膨らませて行きました。

地域で民生委員をやっている友人が一人暮らしの高齢者のことを「独居さん」と言う呼称で話していたのは20数年前のことでしたが、この20年の間に夫が亡くなり、娘にも先立たれて私はれっきとした「独居さん」になりました。

出来るだけ一人で、自分らしい暮らしを続けたい・・・、老人施設への入居時期を遅くしたいものだとウォーキングやストレッチに励む日々を送っています。

コンビニハウス創設時に掲げたスローガンは、「暮らし続けたい住み慣れたこの街で」でした。「障害があっても住み慣れた街で・・・」が今や私の目標となりました。



## 「暮らしお助けサービス」趣意書

年齢を重ねると、暮らしの中で些細なことが出来なくて困ることがあります。例えば冬物の寝具を押し入れの上段に片づけたいのに力がなくて持ち上げられないとか。換気扇にオイル除けのカバーを取り付けたいとか。「誰か手伝ってくれる人が居たら助かるのに・・・」と言う具合に、加齢や障害のためにちょっとした助けを必要としている人は意外に多いのではないのでしょうか。

暮らしを手助けしてくれる人が居ることは心強いし、老人ホームなどへの施設入居の時期を遅らせることが出来ます。そこで、「助けを必要としている人」と「助ける人」を繋ぐ仕組みを作りたいと考えました。

但し、助ける側は仕事としてでは無く親切心で、助けられる側は「何かお礼をしなくては・・・」と言う思いを取り決められた謝礼金に託して感謝の気持ちを伝えることとします。

※利用規則、謝礼金などについては別途定めました。

※詳しくは事務局052-505-6082にお問い合わせください。

※利用会員はNPO法人コンビニの会に会員登録してください。

「助け人」の登録も受け付けます。

但し会員はコンビニの会事務局の近隣地域に限ります。



## 《活動状況》

### 1月

- 5日 生活支援部主任会議
- 8日 VOLO 職員会議
- 11日 WILL/VOLO 祝日開所
- 11日 WILL 職員会議
- 14日 理事会(リモート会議)
- 21日 評議員会
- 20日 通所主任会議
- 22日 会報発送
- 22日 生活支援部総括
- 21日 評議員会(リモート会議)

### 2月

- 1日 名古屋特別支援学校より実習生(VOLO)
- 3日 会報会議
- 8日 WILL 職員会議
- 12日 VOLO 職員会議
- 18日 通所主任会議
- 16日 名古屋特別支援学校より実習生(VOLO)
- 16日 生活支援部総括
- 20日 VOLO 職員会議
- 21日 就職フェア
- 23日 WILL 職員会議
- 25日 通所親の会
- 27日 通所部 研修会



### ローリングストック法とは



東日本大震災から10年。皆様、防災用品の備えはどのようにされていますか？  
震災の時、万一のために備蓄しておいた食料品が賞味期限切れで使いものにならなかった、という話があります。普段から少し多めに食材・加工品を買っておき、使ったら使った分だけ新しく買い足していくことで、常に一定量の食料を家に備蓄しておく方法を**ローリングストック（回転備蓄）**と言います。

防災用品を備えても、時間が経つとつい見直しを忘れてしまいがちですね。  
大切なことは「**もしも**(非日常)」を「**いつも**(日常的に)」意識すること。非常食を日常的に使い続けることで、いざという時に日常的な備えが生きてきます。

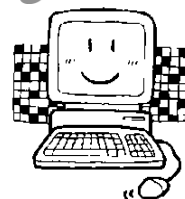


## 事務局コーナー



# 「ご協力ありがとうございました」

1月～2月（敬称略・順不同）



### ★ ご寄付いただいた方々

(NPO 法人コンビニの会)

※会報購読料1万円以上お振込みの方

渡辺武司 山上小枝子

柿沼敬一 松本孝子

### ★ 物品寄付をいただいた方々

(コンビニハウス)

梅村 勝 石原まち 厚生労働省

名古屋市健康福祉局障害支援課

(WILL)

佐藤慶太 浅井宏紀 林 勇輝

渡辺武司 原あゆみ

コープあいち

(VOLO)

石原優樹 高田真由美

小出朱里 久保昂太朗

西ひまわり会

曾我美保 遠藤真衣子

栗山弘美

### ★ 活動にご協力いただいた方々

(コンビニハウス)

大森 信 石原正寅 辻本道子

藤本菜見 石原まち 鈴木千春

寺西 剛 伊藤翔磨 松本浩希

村上梨央 森岡佳乃 上野知志

和田遥香 隅田 豊 西川昇吾

東原光江 田村淳仁 榊原さち

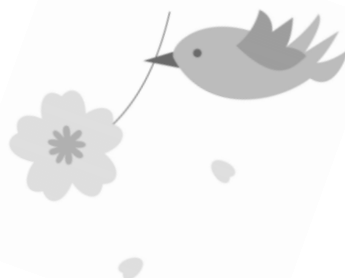
清水柚衣 川口侑里 酒井まみ子

栗本博美 戸谷夏未 牧ヶ野裕子

吉田恵美 磯村みづき

### ★ 会報発送ボランティア

半田素子 吉田嘉子

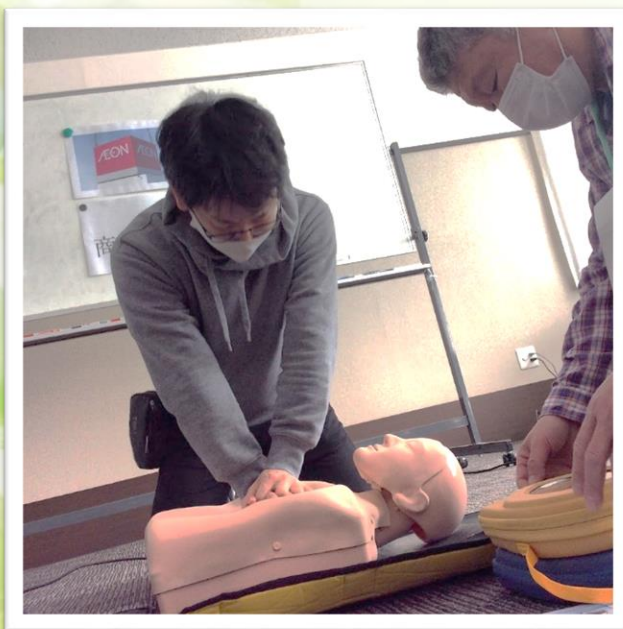


2月27日、通所係職員研修で救命について学びました。

看護師の指導のもと、胸骨圧迫・AED・呼吸・意識の確認を実演形式で行いました。

1分間に100回のリズムで行う胸骨圧迫ではリズム維持のため『アンパンマンのマーチ』をイメージすると良いと知り驚きました。

平常心を持って救命が行える様、定期的な受講の必要性を感じました。 (通所係職員)



SNSはじめました！

日々の出来事やお知らせをInstagram、Twitter、Facebookで随時更新中〜♪

ホームページに各アカウントのリンクがあります☆

### 【銀行口座】

三菱UFJ銀行 小田井支店 店番 238 (普) 口座番号 1440108

特定非営利活動法人 コンビニの会

【郵便振替口座】番号 00800-2-35190 コンビニの会

ご意見・ご質問・お問い合わせは下記までお寄せください。

障害のある人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人

〒452-0807 名古屋市西区歌里町 147 番地

コンビニハウス Tel (052) 502-7731

Fax (052) 505-6082

URL <http://ezeru.sakura.ne.jp/>

E-mail [convini@beach.ocn.ne.jp](mailto:convini@beach.ocn.ne.jp)



コンビニの会

理事 宮川 優子